

ディケンズ「信号手」とポー「アシャー館の崩壊」 —恐ろしさを表す語彙比較—

瀬 良 晴 子

1. はじめに

ディケンズの小説には幽霊が出てくるものが多くある。もっともよく知られているものは「クリスマス・キャロル」であろう。本論で取りあげる「信号手」“The Signalman” (1866) も幽霊の出る小説であり、Everyman’s Library 952 の*Ghost Stories* (1939) に収録されている他、『ちくま文学の森』の一卷『恐ろしい話』(1988)にも翻訳が収録されている。小池 (1979) によると、昭和初期、改造社から出版されていた『世界大衆文学全集』というポケット版シリーズの一冊に岡本綺堂訳『世界怪談名作集』があり、その中にも収録されていたようだ。小池氏が「生まれてはじめてディケンズという作家の存在を知り、その作品を読んだのは、この怪談名作集によってであった」そうである。(小池、1979: 8) なぜ「信号手」はこのように「恐ろしい話」として収録されたのであろうか。幽霊が出てきても「クリスマス・キャロル」は「恐ろしい話」とは分類されないであろう。

本論は「信号手」の「恐ろしさ」が、ディケンズ (1812-1870) のどのような言葉によって描き出されているのかを明らかにすることを主眼としている。作家・作品の文体を考察する際、他の作家・作品と比較することで、それぞれの特徴がより鮮明になる場合が多い。ここでは、同じ時代のエドガー・アラン・ポー (1809-1849) の「アシャー館の崩壊」“The Fall of the House of Usher” (1839) と比較する。

「信号手」(約5100語) と「アシャー館の崩壊」(約7200語) は総語数が比較的近く、語り手が主人公の悩みを聞きながらストーリーが進行し、悲劇的な結末を迎える「恐ろしい話」とあるという類似点がある。まったく異質と思われる作家、ディケンズとポーがそれぞれどのように「恐ろしさ」を描き出しているのか、比較することにより明らかにしていく。

2. 語彙の比較について

言葉の分析に際しては「恐ろしさ」を描く語彙に注目する。特に重要な語彙は、感覚や感情・心理を表す語彙である。しかし語の意味を分析することは、それほど容易ではない。たとえばランカスター大学コンピュータコーパス研究センター (UCREL) の意味分析体系

ディケンズ「信号手」とポー「アシャー館の崩壊」
 - 恐ろしさを表す語彙比較 -

(USAS) において、moonはW (The World & Our Environmentの下位区分W1 (The universe) に、comet, open-air, planet, skyなどの語と共に分類されている。しかし小説の夜の場面、しかも街灯などない自然の中の場面では「明かり」の意味を持つと解釈できることもある。このように意味を機械的に分析することは、特に文学作品においては問題があること、また短編小説でデータも多くないことから、本論では1語ずつ確認しながら、それぞれの語彙を検討する。恐怖を描写するのに特に関係が深いと思われる語彙、上述の感覚と感情・心理¹を表現する語彙について考察する。

3. 作品の比較

3.1 信号手

A 感覚語彙

<a 視覚>

視覚、特に色彩に関する語彙は非常に限られている。2つの重要な色はredとblackで赤は信号、信号手のランプ、黒はトンネルである。この2色が作品を貫いて示され、特に幽霊の現れる場面で危機感と悲劇を表すのに効果をあげている。² 他には太陽・星・月の光が地上の世界（信号所は壕状の地下）のものとして言及されている。また語り手が地上と下を往き来する際、信号手が足元をwhite lightで照らしてくれるが、これはその色から地上の明るさと、人工の光であることから下の世界と関連し、両者の連結の働きをされると思われる。

信号手に関し何度かdark (dark hair, dark sallow man, dark beard, dark regards) と形容されるが、彼は実務的な男であることが常に強調されていることもあり、dark→evil, unnaturalなどの連想はないようである。

視覚に関する動詞が冒頭に頻繁に使われている。これらは語り手が上、信号手が下にいる場面におけるもので、多くup, downを伴う。つまり視覚した内容よりも上下の対比を強調するものであろう。

<b 聴覚>

鮮明な印象を与える音は、ベルの音と叫び声である。この作品では現実的な描写に工夫が多いが、ベルの音では、連絡用のベルと幽霊のベルとが信号手には区別できるとしていて、現実と非現実の対照の一例となっている。叫び声は前項の赤と同様、全体を通じて用いられ危機感・緊迫感を盛り上げている。

他では、通り過ぎる列車の振動音、風と電話線の鳴る寂しげな音、信号手を轆いた列車の警笛（彼には聞こえなかったし幽霊の出る場面でも、なぜかこの音はない）がある。

信号手の声はlowであると何度か言及されているが、これは彼の陰気さより、むしろ冷静さ実務的性格を示すものと思える。

<c 触覚 >

ほとんどすべて切り通しに関するものである。石や空気はじめじめとして冷たく、語り手はまるでunnatural worldに来たかのような印象を受ける。

B 感情・心理語彙

さほど多様ではない。そしてそれらが使われているのは主に信号手の小屋やトンネルについてである。恐怖小説であれば超自然現象についての恐怖感や陰うつさを意味する語が多いのではないかと予想されるが、この作品では語り手が話を聞いてぞっとする箇所はあっても、信号手の恐怖は幽霊自体より起こるかもしれない惨事に対するものなのである。

心理にかかわるものは信号手のtroubleである。ここでも印象深いのは信号手の苦悩が、超自然現象より失われるかもしれぬ人命を救う術のないことに起因するものであることだ。

それにしても信号手の精神状態を示す語はあまりにも表現が乏しい。だがこの作品には随所に現実性—特に信号手に関して—を持たせる工夫が見られる。信号手が実務的な人であることを示したいなら、いたずらに精神衰弱を思わせる語を並べたてより、単にtroubleと簡潔に表現する方が、作品全体の手法と調和していると言える。

3.2 アシャー館の崩壊

A 感覚語彙

<a 視覚>

主調となる色彩は赤・黒・灰色である。アシャー館は古く、周囲の木立も朽ち、物語の背景はdark、あるいはblackである。灰色は石・石壁の色として頻繁に用いられ、赤は自然の太陽の光や色でなく不自然なものとして現れる。血・危険信号の連想からかここでは異様さ・恐怖・狂気を思わせる色で、使われ方も効果的である。特に最後、館が崩壊するとき背景に不気味に輝く血の色をした月はその典型である。

アシャーの顔色の青白さもしばしば言及される。「信号手」と違い、主人公の不健康さ・異常さを際立たせるため、wan, pallidなどが繰り返されている。

この物語では色彩は上のものに限られる。作中多様で明るい色が登場するのはアシャーの作ったバラッドにおいてである。生気にみちた宮殿が悲しみという衣装をつけた悪に襲われるというアシャー家の運命を思わせる詩だが、この詩も最後の色調はred-litten, pale である。前半の明るさ・多彩さは、一層後半の、そしてこの作品全体の暗さを印象づけてい

ディケンズ「信号手」とポー「アシャー館の崩壊」
 - 恐ろしさを表す語彙比較 -

る。

<b 聴覚>

舞台・映画など音声を伴う表現様式にふさわしいと思われるほど効果的に音が用いられている。最初は嵐の前の静けさで、語り手が館に着いたのはsoundless dayで湖も邸内も人も静まりかえっている。次第に聞こえてくるのはアシャーの弾く、語るようなギターのと、低く震えを帯びた彼の声である。この静けさは最後の場面で重要な役割を果たす奇怪な騒々しい音を際立たせる。序曲を成すのは、感覚が異常に鋭敏になったアシャーの聞く、姉が棺の中で身動きする音から始まる一連の音で、実際は微かであるが彼の感覚により増幅される。吹きつゝの嵐の音の高まり、語り手がアシャーを落ち着かせようとして読む物語の中に描写される気味の悪い音と、それに呼応するように聞こえるどこから来るともしれぬ音はオーケストラの盛り上がるの部分で、最後は館が崩壊するときの長く騒々しく叫ぶような音で終わる。その後また静寂が訪れる。実に劇的な音響効果である。

<c 触覚 >

湖があったり、地下室が描写されるが、触覚を表す語はほとんど見られない。

B 感情・心理語彙

かなり多様で数も多い。terror, horror, fearと言った恐怖を示す語が特に頻繁でdreary, melancholy, gloomなどの陰うつさを示す語は家やその周囲の事物に多く付されている。

心理状態を表す語では、oppressがよく使われている。この作品では、環境—朽ち木の木立、苔でおおわれた灰色の石壁、不気味に静まる湖、ゴシック式の高めかしい館自体—から発せられる圧迫感が、恐怖や苦悩の根源を成す。はじめてこの館に来た語り手はinsufferableであると感じ、代々ほとんど傍系が無く続いてきたアシャー家はこのえたいの知れぬ圧迫により家もろとも押し潰されたのであろう。

3.3 比較

同じく「恐怖」を扱った作品として類似点も多い。しかしそれだけに、いかに恐怖感を盛り上げるかの手法の違いは一層興味深い。以下にそれぞれの語彙について比較する。

A 感覚語彙

赤と黒を基調とするところ、しかも黒が不気味さ・悲劇性を示し、赤が危機感・異様さを示していることが類似点である。光あふれる山河や草原の色とは程遠い、コントラストをなすこの2色は、両作品に限らず恐怖小説にはよく使われる。

さて両作品の違いを見ると色が付されている場面・事物自体が異なっているのがわかる。

つまり地下の信号所は、列車・信号手の服等を含めてくすんだ色調であろうし、色彩が限られていることは現実に即して自然である。ところがアシャー家は自然の中にある。木は緑、湖は青であるのが本来の姿だが、それらは灰色であり黒くて異様に輝いていたりする。さらに前者では単にred, tunnel (blackを表すと考えた) とだけ表現されるが後者では lurid, blood red などと表現され故意に気味悪さが強調されている。

聴覚語彙についても同様の相違が見られる。恐怖を伴う音は前者では、たとえ幽霊によるものであるにせよベルの音、人の声である。一方後者では竜の叫びに似た声、葬った人が棺から出る音、鉄の扉の軋る音等々、文字通り恐怖小説的である。

触覚を表す語は「アシャー館の崩壊」にはほとんどない。一方「信号手」では場面の描写に oozy, damp, wet, clammy などが使われるが、これも写実的描写により気味悪さを盛り上げる工夫の1つと言えよう。

B 感情・心理語彙

それぞれに見た通り「信号手」では感情語彙が数も種類も少ないのに「アシャー館の崩壊」では多様である。だが幽霊が出現するのは前者であり、後者は最後の場面までは実際は何も起こらないのである。つまり前者は言わば出来事を淡々と述べる形であり、後者は恐怖映画で気味悪い音楽が恐怖を演出するように、恐怖・陰うつさを表す語を多く用い読者をはらはらさせる。

C 語彙と効果について

両作品はともに語り手によって語られる恐怖小説でありながら、恐怖感の演出法は大きく異なる。「信号手」では作品全体を通して現実性・写実性を強く感じさせるしくみである。たとえば信号手の身の上話に、彼が信号所で言葉や代数一極めて実用的である一を勉強していた、というくだりもある。つまりこの作品は現実を強調することにより恐怖感を一層浮き上がらせる構成になっている。上に見た語彙の用い方はそれを例証するものである。

一方「アシャー館の崩壊」ではクライマックスまでは超自然現象は何も起こらない。それにもかかわらず、いやそれだからこそ舞台はゴシック風の館、主人公は古い家柄の憂うつ症と道具立ても万全にしている。そして上に見てきたように効果的に語彙を使用することで、綿密に読者を現実から引き離す工夫をし、恐怖の雰囲気を高めるのである。

4. ディケンズ作品における「信号手」について

最後に「信号手」についてさらに考察する。上のような比較から、ポーとディケンズの

ディケンズ「信号手」とポー「アシャー館の崩壊」
 - 恐ろしさを表す語彙比較 -

語彙や手法の違いは、それぞれの作家の個性に基づくものと考えられるかもしれない。しかし「信号手」は、ディケンズの他の作品と異なる特徴を持つと思われる。

「1. はじめに」で紹介した小池氏は、はじめて読んだディケンズの作品が「短いけれども実に怖くて、しかも見事に仕組まれた怪談」(小池 1979: 8) である「信号手」であったが、その後英語を学びディケンズを読んでも、この作品の原文にはなかなか出会えなかったそうである。

こうした魅力がふきこぼれんばかりの長篇をいくつか読んでいるうちに、私の探し求める「信号手」はますます遠くなって来るような気がして来た。遂にはいささかやけ気味になって、あの「信号手」の作者チャールズ・ディケンズは、『デイヴィッド・カパーフィールド』その他の著者と同姓同名だが、全然別人ではなからうか、と、無理やり自分に言い聞かせようとしたものである。(小池 1979: 11)

また、Davis (1963: 85-91) は第5章の Tears and Terror: The Techniques of Sentiment and Sensationにおいて、ディケンズ小説における恐怖の場面について、ゴシック小説の3つの影響を説明している。1つは怪しげな建造物である。ゴシック小説における古城に代わるものが多くあるとし、一例として『オリバー・ツイスト』におけるMonksの住まいを挙げているが、その一部は今にも川に沈みこみそうである。2つ目は、謎の追跡者である。Monksや『大いなる遺産』のCompeysonがその例であるが、幽霊の要素を持つものはあまり見られない。3つ目は天候である。ゴシック小説に限らず、恐怖や悲劇の場面には嵐がつきものであり、ディケンズ作品にも多く見られる。

本論で論じた「信号手」と「アシャー館の崩壊」を上記3つの観点から検討すると、建物と天候については「アシャー館の崩壊」があてはまる。また、追跡者はいないものの妹の存在は怪しげである。一方、「信号手」では建物は非常に実際的なものである。また幽霊が出る場面は天気がよく (moonlight night; one morning, as the day was breaking)、特に最後の場面は lovely eveningで太陽もまだ沈みきってはず、語り手は散歩を楽しむために早めに出かけたほどである。確かに幽霊は信号手を悩ませているが、上に示されたディケンズ作品の例では実際の人物であり、その点でもあてはまらない。このことから、恐怖をあらわす手法において「信号手」はディケンズの他の作品とは異なっていると推測される。

ディケンズにおけるコロケーションとして、Hori (2004) に紹介されているeyeあるいはeyesについて「信号手」の場合を見ておこう。信号手のeyesは7回言及されるがそのうち、5回は単にhis eyesであり、後の2例でfixed eyes, hollow eyesが見られる。³ 信号手の苦悩を考えれば、感情を表す形容詞がもっと多用されていても不思議ではない。短編作品であり

この2例が多いか少ないかは一概に言えないが、淡々と恐怖を描写していくという点では、単にhis eyesとした方が全体の語りと調和しているとも言える。

小池（1963: 10）は「信号手」と、緻密な構成などにはあまりこだわらないディケンズの代表的な長編との違いについて次のように述べている。

「信号手」に私が興味をおぼえたのは、作品のムードは陰惨で恐怖にみちていたが、物語の構成が短いながら実に見事にまとまっていて、しかも怪談と言っても決して超自然的・神秘・不可思議の物語ではなく、合理的にちゃんと辻褄がついた解決となっていて、それにもかかわらず（あるいは、後で述べるように、それ故に）怖い後味が残ったからであった。

これは本論で行った言葉の分析からも言えることで、「信号手」はディケンズの言葉の巧みさについても再認識させる作品と言えるだろう。

5. おわりに

「信号手」と「アシャー館の崩壊」における手法の相違は、ここで取り上げ比較した語彙の使い方からのみ導かれるものでない。だがこれらの語彙の相違は全般的な手法を推察する1つの手段でありまた有力な証拠でもある。

両者の感覚・感情語彙は明らかに性格を異にし、それは作品構成の相違を忠実に反映している。さらに多彩な言葉の技法を操るディケンズにあっては、「信号手」は彼の他の作品と異なる手法で一層読者に驚きを与えている。

両作家は、これら語彙の用法に例証されたそれぞれの手法により、自らの特徴を生かした恐怖小説を作り出した、と言えるのではないだろうか。

ディケンズ「信号手」とポー「アシャー館の崩壊」
 - 恐ろしさを表す語彙比較 -

参考文献

- 安野光雅他編 (1988) 『恐ろしい話』 (ちくま文学の森) 筑摩書房。
 小池滋 (1979) 『ディケンズ 19世紀信号手』 冬樹社。
 新野緑 (2004) 「反復の恐怖—ディケンズ「信号手」を読む—」 CiNii (国立情報学研究所)
 <<http://www.dickens.jp/archive/cs/cs-niino.pdf>>
 ポー、エドガー・アラン著、丸谷才一訳 (1976) 「アシャー館の崩壊」『世界文学全集14』 集英社。
 Davis, Earle (1963) *The Flint and the Flame: The Artistry of Charles Dickens*. Columbia: University of Missouri Press.
 Hampden, John, ed. (1939) *Ghost Stories*. Everyman's Library 952. London: J. M. Dent & Sons Ltd.
 Hori, Masahiro (2004) *Investigating Dickens' Style*. New York: Palgrave Macmillan.

注

-
- ¹ USASにおける感情語彙の分類については、範疇 E Emotional actions, states & process に、感覚語彙についてはX Psychological actions, states & processの下位区分X3 Sensoryに属する。X3はさらにX3.2 Sound, X3.3 Touch, X3.4 Sight, X3.5 Smellに細分類される。
- ² 新野緑「反復の恐怖—ディケンズ『信号手』を読む—」(NII論文D(NAID): 40006520678) p.8 にも、以下のような色についての言及がある。
- 夕陽を形容する“glow”“angry”の語がいずれも「赤」を連想させ、その赤い色が語り手を「浸す」“steep”と液体のイメージで表現されることで、語り手を包む夕陽の光は「血」のイメージを帯びることになる。したがって、その光を全身に浴びる語り手の姿は、赤い信号灯のそばに現れる幽霊、轢死した血まみれの信号手、そしてその信号手の血しぶきを浴びたであろう列車の機関手へと重なっていく。
- この「赤」という色が、たとえば「反対側の眺望は短く、その先には陰気な赤いライトと黒々としたトンネルの一層陰気な入口があった」(五二五)という描写にあるように、切り通しやトンネルを覆う「黒」とともに、信号手や幽霊の描写に何度も繰り返されて、小説の不気味な雰囲気醸し出すのに大きな効果を発揮しているのは言うまでもない。(出典:『文学』岩波書店、2004年11・12月号)
- ³ dark regardsが1例あるが、これも形容詞+eyesの関連表現と考えられるかもしれない。

資料1：信号手 (該当の語をすべてあげると非常に煩雑になるため、本文中に言及されているものを中心に例示としてあげたものである。資料2も同様。)

場面	状況	感覚語彙	観賞	触覚/嗅覚	感情/心理
1 (363)	信号手と語り手の出会い、深い嵐状になっている信号所にいる信号手が声をかけ、下に降りていくところ、汽車が通過。	信号手 looked down the line (2) saw my figure high above looked up at me 語り手 saw him (2) looked down at him (2) 光 (his figure) shadowed glow of an angry sunset	語り手の声 'Halloa! Below there!' 'Halloa! Below!' 汽車 vague vibration violent pulsation	clammy stone oozier, wetter (stone) dripping wet wall of jagged stone an earthy, deadly smell cold, chill (wind) damp (air)	reluctance (信号手) dismal place (信号手の仕事場) gloomy (信号) gloomier (トンネルの入り口) depressing (トンネル) lonesome (その場所) not happy in opening any conversation (語り手) saturnine (信号手の顔) latent fear of me (信号手) redoubled anxiety (信号手、ベルに対して) dread (信号手の語り手に対する)
2 (915)	語り手が信号手の所まで行って言葉を交わす。彼は若い頃自然哲学を専攻する大層とは思えない。だが会話の内容は実務的。	語り手 I saw that (2), looked down from up 信号手 direct curious look looked about it looked at me dark sallow man, dark beard (信号手) 色彩 red light (3), light (2), black tunnel 光 a strip of sky, little sunlight, sunshine from between those high stone walls, bright weather, lower shadow	信号手の声 'Yes, (without sound) 信号のベル electric bell, listening for it	unhealthy damp (空気が) colder (the place)	
3 (808)	信号手の詰め所での続き。彼は若い頃自然哲学を専攻する大層な学生であったが放蕩をし、'had gone down, and never risen again' であること、彼が忠勤に職務を果たす人であることがわかる。彼には trouble があることがふと明らかにされる。	fire (3) (信号手の箱の中の) grave dark regards (信号手) fallen colour (信号手の顔) red light, tunnel white light, held up his light (信号手が語り手の足元を照らすのに使う)	said in a quiet manner, low voice (2), remaining silent (信号手) little bell (2) peculiar low voice (信号手)		I am troubled (2) (信号手) trouble very disagreeable sensation (of train coming) (語り手)
4 (796)	夜、2度目の信号手訪問：彼の trouble を聞くという約束のため、1度目の幽霊の出現とその後の事故の始。	white light sat down by the fire moonlit night (幽霊が出た夜) red light (3), tunnel red (lampをとまず) blackness of the tunnel	the distant clocks were striking eleven a tone but a little above whisper (信号手) 'For God's sake, clear the way!' heard a voice cry 'Halloa! Below there!' Look out! (いずれも spectre の叫び声を信号手がまねて言ったもの) hoarse (幽霊の声) wind, wild harp (telegraph wiresの音)	wet stains stealing down the walls and trickling through the arch (幽霊がいたと思われるあたり) frozen finger tracing out my spine (語り手)	troubles me (2) (信号手) utmost passion and vehemence (幽霊の動作) mortal abhorrence (信号手の亡霊、叫びに対する) disagreeable shudder (語り手)
5 (352)	2度目の幽霊の出現、夜明け、その日女性が列車内で急死。	red light, the shaft of the light, daylight	silent (spectre) terrible scream and cries (列車の中で急死した女性) long lamenting wail (wind, and wires)	touching my arm touched me on the arm (信号手が語り手に)	hollow eyes (信号手) surprise, shock (信号手) ghastly nod (信号手)
6 (276)	3度目の出現、1週間前。	the light the Danger-light	'For God's sake, clear the way.' 'Below there! Look out! Look out!' (spectre) little bell (spectreが鳴らす) strange vibration (the spectre's ring)		troubled (信号手) increased passion and vehemence (信号手の話しぶり) no peace or rest (信号手) an agonized manner (spectre)

ディケンズ「信号手」とポー「アシャー館の崩壊」
 - 恐ろしさを表す語彙比較 -

7 (757)	また人が死ぬかもしれないのだと うする術もない。職務に忠実な信号 手の苦悶。語り手は彼がちゃんと自 分の職務を果たしていると言って、 落ち着かせようとする	the Danger-light tunnel stars fire (信号手が戻つめる) dark hair (信号手) red light		wet (stone walls) wiped the drops of heated forehead, wiped the palms (信号手)	dismal (トンネルの入り口) dreadfully (信号手のtrouble) dreadful (起こるであらう) calamity cruel haunting pitiable (信号手のpain), mental torture, oppressed beyond endurance, feverish distress, calm (信号手)
8 (189)	信号手について会社の上司に告げる のは気がひけるので、医者に付き添 うことを申し出ることにする。				
9 (641)	翌日の夕方信号所訪問。 信号手が轢死したことを知る。運 転手の動作、叫びはまさに幽霊のも のであったことがわかる。	lovely evening, the sun was not yet quite down tunnel Danger-light was not yet lighted broad day (信号手が轢死した時) struck the light, had the lamp (信号 手) dark dress (運転手)	whistle (列車) "Below there! Look out! Look out! For God's sake, clear the way!" (運転手が実際発した叫 び)		thrill, nameless horror, a flashing self-reproachful fear (語り手) dreadful time (事故のとき)

ディケンズ「信号手」とポー「アシャー館の崩壊」
 - 恐ろしさを表す語彙比較 -

資料 2 : アシャー館の崩壊

場面	状況	感覚語彙	聴覚・嗅覚	触覚	感情・心理
1 (403)	語り手がアシャー館へ到着、家の周囲の状況の描写 耐えがたい熾うと圧迫感。	dark (day) shades of the evening white (trunks of decayed trees) black and lurid (tarn) unruffled lustre grey (sedg)	soundless (day)		clouds hung oppressively dreary (tract) melancholy (アシャー館) insufferable gloom (語り手) desolate, terrible (natural image) bleak (walls) utter depression, sinking, sickening (語り手の心) unredeemed dreariness (語り手の考え) unnerved (語り手を) sorrowful impression (その家や周囲の) shudder, thrilling (語り手) ghastly (tree-stems)
2 (439)	語り手がロドリック・アシャーの手紙による要請で、この霧に滞在することになつた。	grey (wall) lead-hued (tarn) discoloration (家)	reeked up from the decayed trees silent, pestilent and mystic vapour (tarn)		this mansion of gloom nervous agitation, oppressed (アシャー) cheerfulness of my society
3 (384)	再び家を眺める。朽木や灰色の壁、陰うつな湖。	dark (passages) sombre (tapestries) ebon blackness (floors)	in silence (valet) rattled (trophies)		oppressed (語り手を) sullen (waters of the tarn)
4 (202)	葉藪な葎者によりアシャーの部屋に導かれる。	black (floor) feeble gleams of encrimsoned light dark (draperies) wan (アシャー) luminous (アシャーの目) pallid (アシャーの唇) ghastly pallor (skin) miraculous lustre (eye) lustre of the eye tortured by faint light grey (wall) dim (tarn) wanness (アシャー)	varied rapidly, hollow-sounding (アシャーの聲) the odours of all flowers were oppressive peculiar sounds (...did not inspire him with horror)		comfortless (furniture) sorrow (atmosphere) irredeemable gloom (air) vivacious warmth (アシャー) pity, awe (語り手→アシャー) vivacious, sullen (アシャー) despaired (病気の治癒) horror, terror (アシャーの状況) deplorable (アシャーのため) dread, shudder, intolerable agitation, unnerved, pitiable, FEAR (アシャー) peculiar gloom (アシャー) hopeless, frail dread (語り手→his sister) passionate tears
5 (1334)	ロドリック・アシャーの部屋で、アシャーの印象は青白く、繊細で人間離れしている。アシャーは自分を苦しめている病について説明する。顔についてのアシャーの迷惘。アシャーの病、感覚過敏。たった一人の身内である妹の病。	darkness (アシャーの心) smooth white (絨の中) flood of intense rays, a ghastly and inappropriate splendour (絨の中) [green, radiant, yellow, golden, luminous, pearl and ruby glowing, sparkling, red-litten (window), pale (door)] gray (stone) faint blush (死体)	speaking guitar improvised dirges morbid condition of the auditory nerve [musically, well-tuned, discordant (melody)] silent (influence) sharp grating sound (地下室のドア)	damp (地下)	melancholy, gloom, intolerable awe (アシャー) [sorrow, desolate, hideous (throne)] paradise of the terrible (influence) sinister (medical man) mournful (死体) region of horror (地下室) terrible (死体に浮かんだ微笑)
6 (1905)	アシャーの gloom をはらそうとする語り手の無益な努力。アシャーの即興の音楽、抽象的な絵、パッド 灰色の石や、朽木、特にその並び方や小湖にうつつたそれらの姿。二人の読書一怪奇なもの。レイティ・マツラインの死、アシャーは二週間彼女の死体を保存するという。地下室へ安置。				

ディケンズ「信号手」とポー「アシャー館の崩壊」
 - 恐ろしさを表す語彙比較 -

7 (460)	妹の死後、アシャーの変化。ますます青白く、泣詰の様子。彼女の死後、7-8日後の夜、語り手は不安な気持ちに襲われる。	pallor, more ghostly hue, luminousness (アシャー) dark (draperies) darkness (of a chamber)	quaver (アシャーの声) imaginary sounds (アシャーが聞いている様子) certain low and indefinite sounds		bitter grief (アシャー) unceasingly agitated mind gloomy (furniture) irrepresible tremor, horror, pitiable condition (語り手)
8 (2032)	アシャーがランプを持って、眠れずにいる語り手のもとへやってくる。嵐の夜。アシャーの気をそらすため語り手が本を朗読。本の中で記述されている音と全く同様に思える音がどこかからぬが邸内の遠くより聞こえる。この偶然が3度起こる。アシャーが妹を生きたまま棺に入れたとつぶやく。聞こえていた音は彼女が棺から出て、地下室からこちらへくる音だという。妹、レイディ・マデラインが現れる。語り手はその場から逃げ出す。アシャー館は湖このみこまれたかのようになり、あの裂け目からばらばらに崩壊してしまう。	cadaverously wan (アシャー) glowing in the unnatural light [brazen shield 物語中] [silver pavement, floor 物語中] ebony (開き戸) blood, white robe (レイディ・マデライン) wild light, gleam as unnatural radiance, blood red (moon)	[noise of dry and hollow-sounding 物語中] echo of the cracking and ripping, stiffled and dull rattling (sashes) commingled noise (storm) [shriek, harsh, piercing (dargon), dreadful noise 物語中] low and apparently distant, but harsh protracted and most unusual screaming or grating sound [mighty great and terrible ringing sound 物語中] a distinct hollow, metallic and clangorous, yet apparently muffled reverberation footsteps (レイディ・マデライン) heavy and horrible beating of her heart low moaning cry (レイディ・マデライン) long tumultuous shouting sound like the voice of a thousand waters silently (tarn)	chilling (air) dank (tarn)	appalled (アシャー-語り手) terror, terrible (夜) terror (語り手) [terrible fury of dragon 物語中] shudder (アシャー) hideous import (アシャーの言葉) miserable, wretch (アシャー) terrors he had anticipated sullenly (tarn)